

児童・生徒の社会的自立に向けた個別の指導計画作成システムの構築(3)

——附属東雲中学校養護学級における個別の指導計画の作成及び実践——

黒瀬 基郎	鈴木 盛久	今崎 英明	荒森 紀行
奥野 正二	国元 育子	鬼木 智子	関 和典
梶山 雅司	金子 和代	中田 美緒	船津 守久
谷本 忠明	小林 秀之	若松 昭彦	

I 研究の目的

障害のある児童・生徒の現在及び将来の学校・家庭・地域での充実した生活を実現するためには、個々の児童・生徒の実態把握に基づく指導目標を設定し、その達成に向けて学校、家庭、専門機関が密接に協力していくことが必要である。本研究の目的は、児童・生徒の自立に向けた支援を視野に入れ、個別の指導計画の作成というプロセスを通して、卒業後の進路等を踏まえた授業を作り上げていくための新たなシステムを構築していくことである。その最初の取り組みとして、一昨年度は、附属東雲小・中学校養護学級在学生及び卒業生の保護者を対象に、学校、家庭、大学間の協力のあり方等に関するアンケート調査を実施した。そして、昨年度は、小・中学校養護学級で作成、実践、評価等が進められている個別の指導計画を紹介し、これまで両学級が独自に積み上げてきた教育実践に、個別の指導計画の基本理念がどのように活かされ、具体化されつつあるのかについて検討を行った。今年度は、これまで行われてきた実践を土台として、現時点で実施されている個別の指導計画を提示することとする。ただし、小学校養護学級の個別の指導計画については、昨秋の第110回東雲研究会公開授業での助言者の指摘を受け、教育課程の整備も含めて現在検討中であるため、今回は中学校養護学級の指導計画のみを記述する。

II 中学校養護学級の個別の指導計画

1. はじめに

東雲中学校障害児教育において「表現・コミュニケーション力」の育成は、重要な位置を占める。障害の

ある生徒たちにとって、他者といかに滑らかにコミュニケーションをとるかということが、最大の課題であり、コミュニケーション力がすべての学習および生活の基礎であると言っても過言ではない。以前より我々は、障害のある生徒たちに対して「より豊かでたくましい生活力」を身につけさせるべく個別の指導計画を作成し、個に視点をあてた取り組みを行ってきた。その中で生徒たちに身につけさせるべき力の一つとして「表現・コミュニケーション力」をとりあげ、「3組で育てたい『表現・コミュニケーション力』」について検討するとともに、それらと各教科等との関連を明らかにし、個別の指導計画に盛り込むこととした。

2. 「表現・コミュニケーション力」と各教科等の関連

授業を通して「表現・コミュニケーション力」を育成していくために、「育てたい表現・コミュニケーション力」について検討を重ね、それらと各教科の関連について検討を行っている(表1)。

表1中の「育てたい表現・コミュニケーション力」については、3組の生徒たちに、卒業までに身につけてほしいと願うものをあげている。この内容は、卒業生が定期的に集まり、自主的な活動を展開している「東雲青年学級」のメンバーの実態を参考に、将来の社会生活に向けて、中学校在学中に身につけておくべきと考えられる力をあげている。青年学級生は10代から50代までの幅広い年齢層に就労者を多く含み、現在の3組に在籍する生徒たちの将来像をかなりの確に表

Motoo Kurose, Morihisa Suzuki, Hideaki Imasaki, Noriyuki Aramori, Masatsugu Okuno, Ikuko Kunimoto, Tomoko Oniki, Kazunori Seki, Masashi Kajiyama, Kazuyo Kaneko, Mio Nakata, Morihisa Funatsu, Tadaaki Tanimoto, Hideyuki Kobayashi, Akihiko Wakamatsu: System Development for Devising Individualized Instruction Programs for Students' Social Independence (3) — Devising and practicing individualized instruction programs in special classes of the Attached Shinonome Junior High School —

していると考えている。

「必要となる学習内容」の欄には、「育てたい表現・コミュニケーション力」を育成していくためには、どのような学習内容が必要とされるのかをあげている。内容は単なる教科の学習内容ではなく、実生活の中で求められる力として、より具体的な学習内容を記している。

「関連する教科等」の欄にはそれぞれの「育てたい表現・コミュニケーション力」を育成していくために有効な授業をあげている。どの力も本来全ての教科等に関連してくるものと考えますが、その中でも特に関連が深いと考えられるものをあげているので、記載のな

い教科等が無関係というわけではない。

このように各教科等との関連を明らかにしていき、個別の指導計画に反映させていくことでより実践的な「表現・コミュニケーション力」の育成につながるものと考え、取り組みを行っている。

3. 個別の指導計画と「表現・コミュニケーション力」

生徒たちは、学校在学中に様々な経験をしたり、卒業後に新たな環境で生活したりすることで新たな人間関係が生まれ、いろいろな場面で様々な人々とコミュニケーションをとる機会が生まれる。その際に、これまで身につけてきた知識や経験などを基に、どのよう

表1 3組で育てたい表現・コミュニケーション力と各教科等の学習内容との関連

育てたい表現・コミュニケーション力	必要となる学習内容	関連する教科等
トイレ行きたい言え力～トイレ自己管理能力 身だしなみ力～着飾り力（自己中心おしゃれ力）	体の仕組み 時間・距離 地理的知識感覚 美的感覚 相手の反応をとらえる力	理科 数学 社会 学活 美術
いいわけ力～善悪考え力 叱られてはぶて力～神妙に叱られ力 庇い力～「だめよ」と注意力 不調を説明でき力～処置・助けを求め力 自分から挨拶でき力～知らない人にもでき力 自分の意見を言え力～賛成・反対でき力 電話の取り次ぎでき力～電話の対応でき力 カードでバスに乗れ力～切符を買って乗れ力	言語力 自己を客観視する力 話を聞く力 仲間意識 身体各部位の名称・仕組み・働き 挨拶のしかた 話を聞く力 判断力 話を聞く力 状況判断力 金銭の知識 地理的知識感覚 漢字の知識	道徳（学活 三活） 国語 道徳（学活 三活） 理科 学活 国語 国語 数学 社会 国語
一緒に悪さ力～みんなで悪さ力 好きな友達と遊び力～だれとでも遊び力 好きな人と手つなぎ力～必要に応じて手つなぎ力 敬語・丁寧語知ってる力～敬語・丁寧語使え力 自分の片付けでき力～一緒に片付けでき力 ちょっとは受け入れ力	協調性 仲間意識 協調性 仲間意識 積極性 自立心 自己コントロール力 言葉の知識 環境を整える力 協力 話を聞く力	学活 三活 学活 三活 生単 学活 三活 国語 学活 作業 生単 国語 学活 三活
好きなカラオケ歌い力～相手を意識して歌い力 見聞き触れて感じ力～見聞き触れて感動力 見たことしたこと伝え力～ジェスチュア力 ～イラスト力 ～コメント力	選曲力 状況判断力 歌唱力 歌詞理解力 観察力 想像力 美的感覚 観察力 身体感覚 伝えたいと思う力 観察力 図形の知識 描写力 伝えたい思力 観察力 言語力 文章構成力 伝えたい思力	音楽 総合 国語 美術 音楽 理科 体育 美術 数学 国語 英語
団体競技（演技）で目立ち力～チームプレーでき力 思うがままに活動力～自分の年齢意識力 先生に質問・お願い力～誰にでも質問・お願い力 友達と一緒にやり力～友達励まし応援力 生き物意識観察力～生き物愛し力 一緒に何か参加力～一緒に楽しい時間過ごし力 友達気にし力～友達のいいところ見つけ力 周りのできごと理解力～不思議感覚発動力	自己主張力 自己コントロール力 協調性 自己主張力 自分を客観視する力 状況判断力 積極性 礼儀 言葉遣い 仲間意識 協調性 他者の気持ちを察する力 生命を尊重する力 仲間意識 社交性 他者の気持ちを察する力 仲間意識 思いやり 観察力 好奇心 探求心	体育 社会 理科 総合 生単 学活 三活 生単 英語 学活 三活 生単 理科 道徳 休憩時間 休憩時間 理科 社会 総合

にコミュニケーションを図っていくか自ら考え、実行していきことが求められる。そこで、一人ひとりの生徒が社会の中で生きていくために、卒業時まで

つけてほしい「表現・コミュニケーション力」を個別の目標として設定し、その目標を達成するための指導内容や方法を記入した個別の指導計画を作成すること

表2 個別の指導計画 様式1

個別の指導計画 様式1

生徒名		年 組	年 組	作成者	
-----	--	-----	-----	-----	--

長期目標（卒業後を見据えて）

- ・苦手意識をもつ物にもチャレンジする態度を身につける。
- ・集中できる時間を増やすことと合わせて、基礎体力をつけること。

短期目標（学年終了時を見据えて）

- ・自分のすべきことだけでなく、周囲をまきこんでの活動ができるようになる。
- ・自分からすすんで体を動かし、体力作りに心がける。

保護者からの要望

- ・将来の社会的な自立に向けて、進んで活動できるような態度を身に付けさせたい。
- ・国語、数学などの基本的な内容を身に付けさせたい。
- ・経験領域を広げさせたい。

目標達成に向けての各教科・領域等における目標・内容・方法			
教科・領域等	目標	内容	方法
日常生活の指導	主体性をもたせる。	朝の会・帰りの会・体り*自立心	指示を減らし、すすんで活動できるようにさせる。
生活単元学習	係活動等で、リーダーとしてまとめる。	宿泊学習・発表会をしよう・思い出を作ろう*積極性・協調性	リーダーとしての意識をもたせ、周囲をまとめる。
作業学習	体力作り	夏野菜づくり・畝づくり・土づくり *協力	決められた時間集中して作業を行わせる。
国語	苦手意識の克服。	漢字・作文・説明文*言葉の知識	漢字の書き取り、読みを日常的に行わせ、苦手なものにも日々取り組む態度を身につけさせる。
数学	幅広い考え方を身につける。	四則演算・長さ・金銭*知識・相手を意識力	実生活に即した多くの問題を解かせる。
社会	幅広い考え方を身につける。	地図*自己主張力・客観視力	自分たちの生活に関わりのあることをとりあげ、すすんで学習できるようにする。
理科	幅広い考え方を身につける。	季節の草花・昆虫*観察力・生命尊重力	自分たちの生活に関わりのあることをとりあげ、すすんで学習できるようにする。
コミュニケーション・英語	苦手意識の克服。	英語を使った表現・コミュニケーション*伝えたい思力	うまくまとめて伝えようとする意識が強いので、形よりも気持ちをしっかりと伝えさせるようにする。
芸術（音楽）	友だちと楽しく活動する。	合唱・楽器演奏*相手を意識力	学習集団で一つの物を作り上げさせることで、周囲に対しての意識をもたせるようにする。
芸術（美術）	新しい物にチャレンジする。	貼り絵・水彩画*観察力・想像力	色々な画法を知らせ、幅広く表現できるようにさせる。
体育	体力作り	ソフトバレー・サッカー・マット*自己コントロール力	理論、テクニクに意識がいきがちになるので、全力で体を動かすようにさせる。
選択教科	すすんで学習する態度を身につける	数学*積極性・探求心	自ら選択した内容であるので、主体的に活動させ、興味・関心を深める。
総合的な学習の時間	友だちと協力して主体的に活動する	自ら進んで考え、活動する。*仲間意識・積極性・好奇心	計画から実践までをみんなで協力し行うことで、自信をつけ将来の活動につなげさせる。
休憩時間その他	自分の得意なことを周囲に伝えていく。	昼休憩、部活動等*社交性・仲間意識	決められた活動ではない状態で、自分の思いを表現し、周囲とのふれあいを楽しませる。

とした。

個別の指導計画は、様式1から3まで(表2から表4まで)の3つの様式を作成し、取り組みを行っている(黒瀬ら, 2004)。

様式1(表2)は、昨年度述べたように主に担任が保護者との懇談を通して意向を聞き、それらを汲み入れて作成するものである。今年度は、今までの様式を大きく変更することはせず、「内容」を記載する欄に「表現・コミュニケーション力」を育成するために必要となる学習内容を記入していくこととした。表1中の《*印》の後の記載がそれらである。このようにどの教科でどのような力を主に育成していくのが明確にされることで、担当する教員が今まで以上に個に応じた支援を行うことができるようになってきていると考える。

様式2(表3)は、教科・領域の指導者が作成するものであるが、今年度より「表現・コミュニケーション力」を育成するという観点からの目標を加えた様式に改めることとした。様式1の作成・検討を行った後

に行うことで、指導する教員が短期・長期の展望をもちながら一人ひとりの生徒により細かな支援の計画を立てていくことができる。また、「表現・コミュニケーション力」の欄を新たに設けたことで、国語などの表現力の育成自体が主要な目標となる教科以外の授業での指導目標・方法が明確になり、より滑らかな指導が行えるようになってきたと考えられる。また、様式3については、各教科・領域の單元ごとに生徒の実態に合わせた目標・内容・方法を記載したものである。評価については、前・後期の末に行い年に二回の評価がなされる。項目ごとに評価の欄を設けているのは、生徒自身の評価だけでなく、指導者側の評価も行うためである。実際の評価は今年度より行っているために、表3では前期末の評価のみを記載している。この様式3については、今後まだ検討していく必要があり、全体的な目標に対する評価に併せて「表現・コミュニケーション力」の評価をいかにして記載していくかが今後の課題となっている。

これらの様式1～3の保護者への提示の時期につい

表3 個別の指導計画 様式2

個別の指導計画様式2

教科名 国語 A		作成者 <input type="text"/>
名 前	目標・内容・方法	表現・コミュニケーション力
	もの名前を発音したり、文字で書くことにより言葉をよく理解することができる。	言葉だけでなく身ぶり手ぶり、表情を使って伝えたい内容を表現することができる。
	ひらがなを書くとき、声にだして書くことにより、誤字、脱字のない正しい文字をかくことができる。	言葉で伝えたい内容をくわしく表現することができる。
	文字を正しく発音することで濁音、拗音、促音に気をつけて言葉を書くことができる。	考えていることを言葉で正確に話すことで伝えたい要点を表現することができる。
	語彙力があり、場面に合った的確な言葉を読んだり書いたりすることができる。	伝えたい内容を整理して順序よく話すことでの確にコミュニケーションをとることができる。
	絵カードと文字を結びつけることができ、文字を見て正しく視写することができる。	言葉、身ぶり、指さしなどで自分の気持ちを伝えることができる。

表4 個別の指導計画 様式3

個別の指導計画様式3

教科名	国語A
-----	-----

到達度
A:よくできた
B:できた
C:もうすこし

意欲・態度
◎:よくがんばった
○:がんばった
△:がんばろう

生徒名		年組	年組	作成者	
-----	--	----	----	-----	--

目標達成に向けての各教科・領域における目標・内容・方法							
前 期			中間評価	後 期			総合評価
ひらがな読み	目標	ひらがなを読むことができる。		本を読もう	目標	興味ある本を読むことができる。	
	内容	しりとり、かるたづくり			内容	本を読もう。	
	方法	黒板やプリントに書かれたひらがなを正しく声に出して読むことができる。			方法	興味ある本を自分で選んで読むことができる。	
ひらがな書き	目標	ひらがなを書くことができる。		文を読もう	目標	動作を表す言葉を考えることができる。	
	内容	しりとり、かるたづくり			内容	だれが、どうした	
	方法	黒板を見てプリントに視写できる。自分で考えた言葉を正しく書くことができる。			方法	動作を見て、それを表す言葉を考えて表現できる。	
自分の名前	目標	自分の名前を正しく書くことができる。		文を書こう	目標	身近なできごとを文にすることができる。	
	内容	名前カード			内容	日記	
	方法	自分の名前をひらがなまたは漢字で正しく書くことができる。			方法	身近なできごとをわかりやすく文にして表現できる。	
みんなの名前	目標	みんなの名前を読むことができる。		手紙を書こう	目標	友達や家族に手紙を書くことができる。	
	内容	名前カード			内容	手紙	
	方法	ひらがなまたは漢字で書かれた友達の名前を読むことができる。			方法	身近な人に伝えたい内容を文にして表現できる。	
ものの名前	目標	ものの名前を読んだり、書いたりすることができる。			目標		
	内容	絵カード、プリント			内容		
	方法	濁音、拗音、促音に気をつけながらものの名前を読んだり書いたりできる。			方法		
絵本読み聞かせ	目標	読んだり書いたりできる。			目標		
	内容	絵本の読み聞かせ			内容		
	方法	読み聞かせによって内容を理解して感想を言ったり、登場人物について説明することができる。			方法		

ては、年度当初の早い時期に行うこととしているが、新入生の実態把握に要する時間もあり、5月初旬になっている実態がある。このことも今後の課題としてあげられ、在校生については提示時期を早めていく必要があると考える。また、この個別の指導計画とは別に

学期末に「学習のあゆみ」を各生徒に渡しているが、様式の整備を行っていくことで、この個別の指導計画を従前の「あゆみ」に代えていくよう検討中である。

4. 個別の移行支援計画に向けて

現在、上記に述べたように一人ひとりの生徒に対してより細やかな支援を行うために個別の指導計画の検討を行ってきているが、単一の学校だけでは、個々の生徒の「生きる力」の育成を行うには限りがあり、他の機関との連携が必要とされる。このために、本校では、隣接する附属東雲小学校と連携を深め、互いが作成している個別の指導計画が小中九年間でうまく機能していくように、個別の支援がよりスムーズに移行していけるように検討を進めている。この検討を進めていく中で、卒業後の進学先との連携についてはどのようにあるべきかということも併せて考えているところである。

また、学校以外の諸機関との連携については、大学教員との共同研究を行っていること以外は、未だ行っていないが、現在在籍している生徒の中には、定期的に通院している生徒もあり、相談機関との連携の必要性も感じており、この個別の指導計画の中に医療的な内容や医師の診断を反映させられるような様式に改善していく必要もあると考える。また、現在行っている大学との連携についても今まで以上に中身の濃いものとし、この個別の指導計画がより有効に機能するようにしていきたい。

5. おわりに

障害のある生徒たちにとっての生きる力の中で、「表現・コミュニケーション力」は重要な位置を占めると考える。今後も我々は、これを個別の指導計画の中に位置づけ、さらには、個別の移行支援計画への発展を見据えた取り組みとして継続していくつもりである。

Ⅲ 結論

今年度は、卒業生の実態を参考に、将来的に必要な「表現・コミュニケーション力」の育成を個別の指導計画に盛り込んだ教育実践を開始しつつある中学校養

護学級について紹介した。個々の生徒の「表現・コミュニケーション力」を育てるための具体的な手立てや評価方法などに関しては、今後も引き続き検討されるべき課題であると考えられるが、大学との連携の下に、個別の指導計画を基軸とした実践の一つの方向性が定まりつつあるという意味では大いに評価されるべきであろう。

また、個別の移行支援計画に関連して、中学校養護学級卒業予定者の一部については、心理検査の実施による認知機能等の評価を近く予定しており、卒業後の進学先との連携の端緒となり得るのではないかと予想される。今後は、こうした実態把握等に関しても、小・中学校と大学がより密接に協力していくことが必要であろう。

参考文献

- 荒森紀行・国元育子・奥野正二・泉本聖子・船津守久・小林秀之「障害児教育における「表現・コミュニケーション力」の育成と評価 ―より豊かでたくましい生活力の育成を目指して―」広島大学附属東雲中学校研究紀要『中学教育』第36集 pp. 125-134 2004
- 黒瀬基郎・鈴木盛久・今崎英明・荒森紀行・泉本聖子・奥野正二・国元育子・関和典・梶山雅司・金子和代・中田美緒・船津守久・谷本忠明・小林秀之・若松昭彦「児童・生徒の社会的自立に向けた個別の指導計画作成システムの構築(2) ―附属東雲小・中学校養護学校における個別の指導計画の作成および実践―」広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要 第32号 pp. 91-100 2004
- 清水貞夫監修・三浦光哉編・宮城教育大学 ITP 研究会著「新・個別の指導計画と個別アプローチプラン ―日本型 IEP の実現を目指して―」学苑社 2000
- 東京 IEP 研究会編「個別教育・援助プラン」財団法人 安田生命社会事業団 2000